

コラム 04 — 征韓論

太政大臣・三条実美による征韓論原案は、「我国の誠意に応えぬばかりか、却って驕慢と侮辱の態度を示すに至った」と朝鮮を非難し、居留民保護のため、若干の陸軍と軍艦を派遣し、その上で使節を送って談判し、正理公道を説くべきであるというものでありました。

これに対し、参議・西郷隆盛の征韓論は、前者を否定し「いま俄かに出兵すれば、朝鮮は日本が朝鮮を併呑するものと疑うであろう。これでは当初から朝鮮に対する徳義に反することになる。まず責任ある全権使節を派遣し、正理公道を以って我国の意図を説き、朝鮮政府に非を悟らせるべきである」と述べ、西郷は自ら全権使節になることを主張しました。そして、「全権として一兵も従えず、正理公道のみを信じて京城に乗り込み談判する。それでも朝鮮側が傲岸な態度を改めず、自分を爆殺するような事態になれば、其の時に初めて出兵すべし」というものでありました。西郷は、出兵には正しい名分が必要であるとし、そのためには自らの命をも敢えて犠牲にすることも辞さなかったのであります。さらに、西郷の眼中には、一朝鮮があったのではなく、迫り来る列強の脅威、特に北からの朝鮮を取り込んだロシアの南進に備えるという遠大な構想があったと思われれます。

しかし、この西郷の征韓論も「内政整わず、また樺太に露国との紛争頻発する現状では、遺韓使節を派するのは時期尚早」との岩倉具視らの意見に敗れ、下野することになります。

鹿児島に下野した西郷は、訪ねてきた庄内藩元家老・菅実秀に「いずれロシアは、満州、朝鮮半島を経て日本に迫ってくる。これこそ第2の元寇であり、日本にとって生死の問題になる」と語っており、西郷の先見性を覗うことができます。